
時と想いを超えて ~ ヒカルとティナの冒険記 ~

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と想いを超えて　～ヒカルとティナの冒険記～

【Nコード】

N8916Z

【作者名】

ホープ

【あらすじ】

ここはポケモンだけが住む世界。多くのポケモンが探検隊を結成して、人助けならぬポケ助けや、未開の地の搜索などをして、日々充実した日々を送っていた。

もちろん、イーブイのティナも探検隊にとっても憧れているのだが、なかなか後一步が踏み出せないでいた。

そんな中、突如元人間だというヒカルと海岸で出会って　？

【ポケモン不思議のダンジョン空の探検隊のストーリーを尊重しつつ、オリジナルのストーリーも展開されていきます】

プロローグ：嵐の海で

とても激しい嵐の夜。そんな中、この海を割くように進んでいく
僕らの乗っている船。目指すはこの世界で一番大きい大陸だ。

早くしなければ、またあいつが追ってくる。そうなれば振り出し
に戻るのには目に見えているから、今度こそあいつが来る前に終わら
せよう。

少し遠くに大きな影が見えてきた。もう少しだ。もう少しで僕ら
の目指している大陸に到着できる。

そんな、一瞬も気が抜けない中、突然の轟音と迸る閃光が走る。
それを感じたと思った次の瞬間には、まぶた瞼をとても重く感じ、体に力
が入らなくなっていた。

「大丈夫か！？　しつかりしろ！　しつかりするんだ！」

僕の相棒が心配しているのが分かる。でも、今さっき何があった
のか僕には全然分からない。

「何が……？」

「お前に雷が直撃したんだ！　意識を保て！」

僕の相棒に、僕に雷が落ちたと言われても、全く現実味を感じる
ことが出来ない。事実を把握できない。そもそも、何で僕は嵐の日
に海の真ん中にいるの？

「無理するな。まずはお前の安全が第一だ」

この声が誰だか分からない。とても頼りにしていた声だとは思っけど、それが誰なのかが全く分からない。思い出そうとすると頭が痛くなる。

「うおっ!？」

今にも二つに裂けてしまいそうな、海を二つに割いて進んでいた船が、音を立ててバラバラに碎ける。誰だか分からないような煩わしい声は破片に乗ってどこかへ流れていき、僕は海の中に放り出された。

必死に僕の名前を呼ぶ誰かの声は耳に残る事もなく、ただこの大波と同じように流されていく。それを叫んでいるポケモンも一緒に。

途中に感じた妙な違和感を最後に、僕の意識は完全に、消えた。

第一話：流れ着く光

「またダメ、なのかなあ……」

目の前のピンクのポケモンをモチーフにした建物　プクリンのギルドはともフレンドリーに笑っている。だけれど、私はそれに恐怖心しか抱いて無い。

だってだって、中がどうなってるか分からないんだよ？　修業はとても厳しいって聞くし、もしかしたら間違えられて襲われちゃうかもしれないし……。

自分の中でもそれはあり得ないと否定する声が聞こえる。でも、それでもこの建物は怖い。

「ううん。今日こそは勇気を出さなきゃ。早くしないと日が暮れちゃうもん」

覚悟を置いて……あれ？　覚悟を決めてっていうんだっけ。どっちでもいいかな。

とにかく、がっしりとしてまっている鉄格子を開けてもらおうと入口の方まで、一歩一歩踏みしめて歩く。いつもは歩き出す事も出来ずに帰ってしまうけど、今日はなんだかほんの少しの勇気が持てた。

足場が網目模様になっている所に差し掛かると、自分の下の部分から声が聞こえ　！

「ポケモン発見ポケモン発見！」

「わあっ！」

その声を聞いて、おもわず後ろに飛び退いちゃった。あう、やっぱり私には無理なのかな……？

「誰の足形？ 誰の足形？」

「足形はイーブイ！ 足形はイーブイ！」

私の種族名が出ると、顔から火が噴き出るかのように緊張してしまつて、もう私は、無我夢中でプクリンのギルドがある小高い丘を駆け下りていた。

私つて、自分の種族名が知らただけでこんなにも怯えちゃう。これじゃあ探検隊なんて夢のまた夢……。

火照った顔が少しずつ、少しだけ冷やされて行く。もう少しでいつもの場所にたどり着ける。それまで頑張つて走り抜けよう。

少し息が上がって来ている。あのギルドから海岸までほんの少しの距離しかないのに。

火照った顔と走り疲れた体を癒すのに、この海岸はとても丁度良い所。静かな波の音と、足のすぐ近くまで来る水が私の体と心を癒してくれている。海を眺めれば、沈みかけの夕陽がまだ少し顔を出していた。

少し落ち着いてきた所で、さっきの事を思い出す。ずっとプクリンのギルドの前で耳を垂らしながらうるちよろしていて、やっと思いで覚悟を決めたのに、ほんの少しビックリした事があっただけでここまで逃げてきてしまったんだっけ。

「はぁ……。私って、どうしてこんなにも弱虫なんだろう」

この、静かな波の音は私を責め立てることもないし、驚かせることもない。昨日の嵐の時の波とは全然違う、優しい波の音だ。

よくよく海岸を見てみると、昨日の嵐のせいで折れた木々などが流れ着いているのが目についた。

「弱虫な私でも、この海岸を綺麗にするくらいなら出来るもん」

一つ、私のすぐ隣にあった小枝を咥え、海岸の端っこにある岩場の所に置いた。ここならあまり目立たないと思う。

一つ、また一つと小枝を拾ううちに、明日こそはきっと頑張れると思えてきた。

理由なんてない。でも、自分の心の中に何かが芽生えてきたと私は思えた。……。ん？ あれはなんだろう。砂の色に紛れてたけど、あれは、ポケモン？

この海岸のちょうど真ん中あたり。海に潮が満ちてきたら沈んでしまいそうな所にそのポケモンはいた。

助けなくちゃ。

まだ潮が満ちる時間には程遠い。私はそのポケモンを助けたい一心ですぐに近寄っていった。

近寄ってみて分かる。このポケモンは私と同じくらいの年みたい。まだ、私と同じくらい未来に可能性があるポケモン。助けたいと思う気持ちが強くなる。

「ねえ、大丈夫？　ねえねえ！」

必死にこの黄色くて可愛い姿をしたポケモン　ピカチュウの体を揺さぶってみる。反応は、あった。かすかにうめき声が聞こえたの。

「しっかりして！」

酷く体をゆすられて、何事かと思って僕は^{まぶた}瞼を持ちあげた。目の前には可愛い等身大のイーブイが、心配したまなざしでこちらを見つめてきている。……等身大？

「うわぁー！」

しかし、僕が飛び起きたことでそのまなざしが安堵した物に変わる。悪いひと……悪いポケモンじゃないみたい。

「良かったあ。どこが悪い所はない？」

「え、え……？」

イーブイだね？ 僕の目の前にいるのは、正真正銘のイーブイだね？

心配そうなまなざしを向けているから、僕を心配しているのは間違いない。それはとても嬉しい。でも、問題は別の所にある。

何で、ニンゲンの僕がイーブイの言葉を理解できるんだ？

「え、えーっと、ちょっと聞いてもいい？」

「なあに？ 私が答えられる事だったら何でも答えるよ！」

それじゃあ遠慮なく訊ねられる。僕は……。

「僕は、今どんな姿をしているのかな？」

自分でもこんなに頭が回るとは思わなかった。自分がポケモンの言葉が理解できるということは、自分がポケモンになってしまったか、頭がおかしくなってしまったかの二択だ。もしかしたら、このイーブイが天才で、人の言葉が分かるのかもしれないという可能性もあるけど……。

「あはは。どこからどう見ても普通のピカチュウだよ。それがどうかしたの？」

発する言葉が見当たらない。でも、手を見てみればとても黄色く、背中を振り向けば大きな尻尾が。ほっぺたには小さなふくらみがあるのが分かる。

「え、嘘！ ホントにピカチュウになっちゃったの？」

「なっちゃったって……。なんか怪しいね、キミ」

僕も怪しいと思うよ。突然こんなのが現れたら僕もこんなリアクションを取ると思う。

「全然、全く怪しくないよ！ それより、助けてくれてありがとう」

弁解はしたけど、信用してもらえるかは分からない。でも、このイーブイは信用してくれたみたい。目から疑いの色が消える。

「どういたしましてっ！ 私はティナ、キミは？」

感謝されたのがとても嬉しかったみたいだ。体全体、特に尻尾で喜びを表している。

「僕は……ヒカル。信じてもらえないかもしれないけど、元々は人間だったんだ」

僕のその一言がとても衝撃的だったようだ。イーブイ ティナはちよつと後ろに飛び退く。さっきも少し思ったけど、ティナはリアクションがとても大きい。

「え、ええー！？ でも、今はどこからどう見てもピカチュウだよ、ヒカル」

「そうなんだよ。僕にも何が何だか分からないんだ」

ティナが悩み始めると、辺り一面を波の音だけが包み込む。

どうして、ニンゲンだったって覚えてるんだろう。それ以外の事は思いだそうとすると、頭が痛くなる。

うーん、僕がポケモンになる前、一体何があったんだろう。

思い出せない。記憶をしまっているタンスの鍵がそのタンスの中に入っている、そんな感じた。一つのことか思い出せば全てが思い出せそうなのに、その鍵が見つからない。

この話を切り上げよう。そう思ってティナと向き直したとき、ティナがどこか遠くを眺めているのに気がついた。僕もそっちの方を見ていると、そこにはあまり良い雰囲気とは言えない、三匹のポケモンがいた。

「ヒカルヒカル。あれってかなり危ない状況だよ！ 早く助けないと……」

ティナの言うとおり、一匹の青い、まん丸としたポケモンと、二匹の空を飛んでいるいかにも柄が悪そうなポケモンが向かい合い、対峙しているところだった。

「リルはどこにいるの？ 君達がどこかに連れてったって聞いたけど」

水色のポケモンはリルをと呼ばれるポケモンを探しているみたい。

「あの小さい水色のポケモン？ その洞窟の中においてきちゃったなあ。ハハ、困ったよ、ドガース君」

「そうだなあ、俺達も疲れちゃって、もう洞窟になんか入れないぜ」

それに対し柄の悪い二匹のポケモン　片方はドガースというらしい奴らは、詫びる様子もなく、水色のポケモンをおちよくつていた。

その二匹の言葉に絶句した水色のポケモンは、ショックで目に涙をためている。　あいつら、あんなにひどい事を平然と言うなんて、絶対に許せない。

「俺達は帰るけど、一匹でも行けると思っんなら行けばいいじゃないか。すぐそこの洞窟だよ」

最後まで、詫びるところか水色のポケモンをおちよくり倒していた。それにはティナも堪え切れない様子だったけど、まずはあのポケモンを助けるのが先決。ティナが喧嘩を吹っ掛ける前に僕は水色のポケモンの方に近寄って行った。

「ねえ、リルってポケモンを探してるの？　僕達に出来る事があるなら手伝うよ？」

そのポケモンはまだ涙を目に溜めているだけだったけど、今にも泣き出しそうな勢いだ。

「え……？　ホント、ですか？」

「もちろん！　私もヒカルも、困っているポケモンを見捨てるなんて出来ないもの」

ティナも怒りを抑えてこちらに来てくれたみたいだ。しかも、僕の事をもう友達のように扱ってくれている。

「ありがとうございます！」

涙を拭う仕草をすることもなく、僕達にお礼を述べてくれた。少し、彼の顔に笑顔が戻ってくる。

「ボクはマリルのリオと言います。実は、リルはボクの弟で、ボクがちよっと目を離れた隙に……あいつらに……連れて行かれて……しまつて……」

だんだんと言葉の齒切れが悪くなり、今にも泣き出しそうなそんな雰囲気醸し出していた。きつと、とても弟思いのポケモンなんだろう。

「そこまでいいよ。それ以上話すのは、辛いでしょ？ 私達が洞窟にいるリル君を助けてくるから、それまで待っていてくれるかな」

リオの頷きを見ると、ティナは笑顔でそれを返し、足早に海岸の横にそびえたつ横穴に向かっていく。無論、僕もそれを追う。

入口の前では、洞窟内から零れ出る湿気をかすかに感じ取ることが出来た。きつと、中は海水がしみ込んでいるのだと思う。

いざ中へとティナが進むのかと思ったら、洞窟の前で恐れをなしたように震えていた。

「ティナ、大丈夫？」

「あつ、……うん、大丈夫！ それじゃ、リル君を助けに行こう！」

まだ震えている前足を必死に動かしながら、洞窟の中へ進んでいく。きつと、ティナも怖いんだろう。僕もちょっとだけ、怖い。

恐怖で塗り潰されそうな少しの勇気を振り絞って、僕もティナも、洞窟へ踏み入る一步を踏み出す。ただ、リル君を助けたいという思いだけを胸に。

第一話：流れ着く光（後書き）

サブタイトルの流れ着く光からも分かるように、ヒカルの名前は漢字で書くと光になります。

第二話：海岸の洞窟

この洞窟に入って最初のうちは暗闇の中、手探りで進んでいた。

少し進むとぽっかりと開いた洞窟の穴から海水が入り込んでいたりしていたりする地形が見つかって、そこからまぶしいほどの夕焼けが差し込んでくる。

僕の前を歩くティナは、足はガクガク震えていて、気を許せばいつでも転んでしまいそうなほど、おぼつかない歩き方をしていた。

「……これ、かなあ？」

ティナが立ち止って、細く、縦に長い洞窟の裂け目の中を見渡そうとしている。足を止めていると、その震えが更によく伝わってくる。でも、リル君を助けるために、どんなに怖くても足を止めずに歩み続けるその姿は、僕の心の中にも伝わってくる物があった。

「ヒカル。ヒカルは知らないと思うけど、この先は『不思議のダンジョン』って呼ばれる所だね、えーっと、入るたびに地形が変わる所だったと思うけど……。ごめんね、ここら辺の記憶はダメダメ」

ティナの話の通りなら、確かに不思議な所だ。入るたびに地形が変わる……。何でそんなことが起きるんだろう。

でも、そんな疑問を考える時間はない。まずはリル君を助けるのが第一だから。

「分かった。でも、この中にリル君がいるんでしょ？ それなら行

かなくちゃ！」

上手く説明できなくて落ち込んでいたティナだったけど、リル君という言葉ではっとして、その表情には助けたいという気持ちが満ち溢れている。

「うん！ 私達がここで立ち止まっててもダメだもんね！ 勇気を振り絞ってリル君を助けにいかなくちゃ！」

少しずつ、ティナの足の震えが治まってきているのを僕は感じていた。

なんと、その縦に長い裂け目の中は階段になっていたようで、ティナはわき目も振らずに飛び降りるようにして駆け抜けていく。

後を追うように僕も進み始めたけど、この中は外よりもじめじめしていて、地面がとても滑りやすい。気を抜いたらいつでも転んでしまいそうだ。

「きゃっ！」

ティナの短い悲鳴の後の、どたどたと騒がしい音。これは滑っちゃった時の音だね……。ティナっておっちょこちょいなのかな。

「大丈夫ー？ もしかして滑っちゃった？」

駆け下りながら、ティナに声をかけると、奥から「いてて」という声が重なって聞こえてくる。

他にも誰かいるの？ 声は高かったから女の子が小さなポケ

モンかな。

「あ、ごめんなさい！」

僕が駆け下りた時は、ティナが謝っている最中だった。ぶつかってしまったのかなと推測してみる。

謝られているポケモンは、無言でティナを上目遣いで見つめていた。

そのポケモンの体は全体的に青く、自分の体と同じくらいの尻尾が付いている。……もしかして、リル君？ リオ君から教えてもらった情報と綺麗に一致する。

無言で見ているんじゃないくて、怖くて何も言いたせないのかも……。

「ティナ、よく見てみて。この子、ルリリのリル君だよ」

えっと、目を見開いて驚いているところから察するに、何で僕が名前を知っているだろうとでも考えているのかな。

「あつ……。本当だ。リル君！ 上でお兄ちゃんが待ってるよ。早く上に行く？」

ティナの誘いを体全体を横に振って受け入れないリル君。あのポケモン達に騙されたから警戒心が強くなっているのかもしれない。

「大丈夫、僕達は君を騙したり、酷い目に遭わせたりなんかしないから。ね？」

それでも、ボク達の誘いを受け入れない。僕は何か事情があるのかもしれないと思った。

ティナも同じことを思いついたみたいで、優しく、リル君と目の高さを同じにしながら　元々あまり変わらないけど　訊ね始めた。

「リル君？　何か困っている事はある？　お姉ちゃん達が助けてあげるから、素直に話してみて」

「お……おと」

リル君がやっと口を開いてくれたけど、おとってなんだろう。音は水が垂れる音しかないし……。

「ん？　もう少し大きな声で言ってみて」

「宝物を、落としちゃったの……」

今にも消え入りそうな声だったけど、ここが洞窟ということもあってなんとか聞きとることが出来た。

宝物……。小さな子だから、綺麗な石とか、そこら辺に落ちているのものかな。あ、でも、小さな子って細かい違いもすぐに見つけるからなあ。そういうのだったら骨が折れそう……。

「分かった。私達が探してきてあげる！　その宝物って、どんなの？」

リル君の目がパツと輝いたて、さっきまでの雰囲気を一変させた。
どこにでもいそうな、子供のような雰囲気身を纏っている。

きつと、これがこの子のいつもの姿だろう。

「水のフロートっていうの。水色で、えつと、えつと……」

「み、水フロート!？」

ティナの驚きようから考えると、かなり珍しい、または高価なものだろう。分からないけど。

「わかった、必ず見つけるよ! ティナ、先にリル君を上まで送っていつてもらっていい?」

形状も色も何も分からない。だけど、何故か見つけれられると思った。

「うん、分かった。ヒカルもあまり動かないでね?」

それは僕を心配するものなのか、僕とすぐ合流したいからなのか……。どっちだろう。目を見る限りはどちらの意味にもとれる。

「それじゃあ、僕はこの辺りで探す事にするよ」

ティナもその言葉を聞いて軽く微笑みながら、リル君と横になって、慎重に階段を上って行った。さっき落ちちゃったから慎重になつてゐるんだろう。

その後ろ姿を見送って、よし探そうと前を振り向いたら、突然泥

の雨が降り注いでくる。

その雨の中心には青い、ぐちょぐちょした体をしているポケモンがいた。

「えっ、どうしたの？」

いきなり泥をまき散らすものだから、心配して駆け寄ると、突然泥の塊をぶつけられる。結構痛いんだね、泥の塊って。

それより、泥が目や口に入って気分が悪い。今の顔はきつと凄い事になっているんだろう。

説得を試みたけど、何も聞いちゃくれない。言葉の代わりに飛んでくるのは、泥の塊だけだった。最初は痛いだけだったんだけど、だんだんと体がだるくなってきている。ピカチュウは泥とかに弱いのもかもしれない。

泥のせいか、朦朧もうろうとしている意識のせいか。とにかく、見にくい目で相手の顔を見ると、何かに操られているのかと思うような感じだった。自我が無く、何かに突き動かされているような、そんな感じ。

ここで、僕は初めて危機感を持った。だって、さっきまでは話の通じるポケモンだと思っていたけど、話が通じないなら僕のこの状態はかなり危ない。

「危ないよヒカル！」

僕の左側から、また泥の塊が飛んで来ていたようだ。当たる瞬間

にティナが飛び出してきて庇ってくれたみたい。

ティナは一呼吸も置かずに走り出すと、その泥の塊を打ち出した張本人に頭から突っ込んでいく。

技を出した硬直か何かで動けなかったそのポケモンは、ティナの一撃をもろに受けてしまって大きく、放物線を描くように吹き飛ばされた。

もちろん、その衝撃には耐えきれなかったようで、ぐるぐると目を回している。

「ごめんねヒカル。私のせいで、ヒカルを危険に巻き込んで……」

「大丈夫だよ、僕は気にしてないから」

垂れていた耳が、その一言でまた元通りになる。とても分かりやすい。

「ホント？ ホントに？」

僕もさっきの言葉に嘘はなかったし、ちゃんと頷く。ティナは感激した様子で走り寄ってきた。

「許してくれてありがとう！ まずは、オレンの実を食べて。それから、さっきまで忘れていたダンジョンの事を教えるね」

オレンの実と言うのは、体力を回復してくれる木の実だそうだ。味は色々と混じっていてよく分からなかったけど、朦朧とした意識が回復するのは分かった。

話を聞くうちに、どうして謝ったのか分かるような気がしてくる。

要約すると、ここ、不思議のダンジョンに住むポケモン達は何故か凶暴になっていて、いつ襲ってくるか分からない事。また、最近是不思議のダンジョンの中で遭難者などが相次いでいるから、子供はむやみに近づいてはいけないという事らしい。

ちなみに、その遭難者を助けるのが探検隊の仕事ということも言っていた。その時のティナの生き生きとした表情は、今まで見た中で最高のものだったと思う。

「そんなことがあったんだ」

ティナは、多分この凶暴になっているという事を教え忘れた自分のせいで僕がけがをしたって思っているのかな。

「それと、ティナ。何でかは分からないけど、僕はあまり他のニンゲン、この世界では他のポケモンを傷つけないんだ」

「何で？ 私もあまり他のポケモンを傷つけないけど、何もなかったら自分が倒されちゃうもん」

「僕も分からない。ニンゲンだったころの記憶があれば分かるのかもしれないけどね……」

そこでこの話は終わりになった。

この後は、近くの水たまりで体についた泥を洗い流し、水のフロートの搜索を続けた。

ここの不思議のダンジョンは海岸の洞窟と呼ばれているみたいで、確かに海と接していて、海水が至る所に溢れ出ている。

また、この洞窟を支えているのは、入口の形にも近い、無数の細長い柱だけ。その柱の中に階段があるときがあつて、それを使いながら降りて行つたけど、水のフロートを見つけることは出来なかった。

最深部は海の下にあるのに海水が入つてこない、本当に不思議な場所で、海を下から見上げるといふ初めての体験が出来た。 記
憶が無いから、初めてかどうかは分からないけど。

と、地上に戻る時に思い返してみれば、搜索よりもその不思議な地形を見る事に力がいつてしまったかもしれない。

「見つからなかったね……」

ティナから漏れる声は、そのやりきれない気持ちがありありと思ひ浮かべられる。

「ねえティナ。こういう落し物を探す仕事って無いの？」

励ましてあげたい。そう思った僕は、洞窟の中でした探検隊の話に誘導する。上手くいくかは不安だけどね。

「それは探検隊の仕事だよ」

あまり声の表情は変わらなかったけど、探検隊と言うワードを引っ張り出せば十分だ。

「それじゃあさ、ティナと僕で探検隊をやろうよ！ リル君の水のフロートも探してあげたいし、リル君を助けるときのティナの表情を見て、ティナは探検隊に向いていると思ったんだ」

「えっ
」

その時の、嬉しさと喜びと、楽しみとちょっぴりの不安が入り混じった、ティナの表情を忘れることはできない。

「私……探検隊に何度にもなろうと、頑張ってたんだ。だけど、勇気が無くて、そこまで出来なくて……。でもね、私、ヒカルとなら出来ると思うんだ！ あの時、ヒカルがカラナクシに襲われているときも、本当は助けるのが怖かった」

ティナはそこで言葉を区切る。きっと、この先紡ぎだされる言葉は、ティナの決意の言葉だろう。僕は、それをしっかりと受け止める必要がある。

「自分が襲われたらどうしようとか、怪我を負ったらどうしようとか、そんなことばかり考えてた。でも、飛んでくる攻撃を見た瞬間、そんなのどうでもよくなったんだ。ヒカルが助かればそれでいいと思った。ヒカルという私には勇気が出てくるの。だから、私もヒカルと探検隊をやりたい」

洞窟内で交わした言葉は、きっと一生忘れることが出来ない物。そして、ティナというポケモンに出会えてとてもよかったと、心から思えた瞬間でもあった。

第二話：海岸の洞窟（後書き）

次回は、リル君達とのお話からです。あのまま放置ということはないのでご安心を。

第三話：長い一日の終わり

「本当にごめんね……。見つけれなかったんだ」

しゅんとするティナの横顔を見ると、無責任に引き受けた僕にも罪悪感がわいてくる。

「いいんです。リルが助かっただけでも十分ですから」

そういつてもらえると嬉しいけど、本当は絶対に見つけなきゃいけないんだよね。

僕にもティナにも、彼らにかける言葉が見当たらず、重苦しい雰囲気か辺りを支配する。リル君もリオ君も気まずそうな顔だ。

この雰囲気を変えるのは僕の役目だ。今日はティナにたくさん助けてもらった。一つぐらい恩返しをしないと。

「リル君。必ず、水のフロートは見つけ出すから。それまで待っていてくれるかな」

リル君はこくりと、小さな体で頷いてくれた。

「それでは、ボク達はそろそろ帰らないと……」

「そろそろ暗くなるから、リオ君達も気をつけて帰ってね」

ティナも、別れの言葉は重苦しい雰囲気の中で言う事が出来た。その声は少しの決意が感じられる、はっきとした声。

僕とティナは彼らの後姿が見えなくなるまでしつかりと見送る。
小さな子を見守るのは当たり前だし、また変なポケモンに絡まれちゃうかもしれないから。

「私達も行こうよ。もう少しで完全に日が落ちちゃうよ?。」

とティナに言われて気付く。日が傾いてきてから海岸の洞窟に入ったのに、全然時間が経過していない。少しだけ太陽が動いたくらいだ。

「ねえティナ。不思議のダンジョンの中にいた時間ってどうなってるの?。」

ティナはもう歩きだしていて、僕の数歩先にいたけど、振り向いて答えてくれた。

「私もよく知らないの。ダンジョンに入ったのもこれが初めてで、前までは他のポケモンの話しか聞いて無かったから」

ティナに分からないんじゃ、僕に分かるはずがない。難しい事を考えるのをやめて、僕も歩きだす。

少し歩いた、交差点に差し掛かった所でティナが話しかけてくる。

「ヒカル。私達の初めての依頼はあの兄弟からの依頼だね。ちょっと強引に引き受けちゃったけど」

「そうだね。だから、絶対に水のフロートを見つけ出そう!。」

ほとんど沈みかけた太陽の代わりに、空に浮かび始める真っ白な月。その静かな光のおかげで、僕達は今日の事を振り返り、目的を再確認することが出来た。

真っ白な月と両側に灯された松明に照らされる、妙にフレンドリーなピンク色のポケモンをモチーフにした建物。その真下の部分には鉄で造られた格子が嵌められている。

「ここがプクリンのギルドっていう所で、探検隊になるならギルドに弟子入りしなきゃいけないんだ」

それで、ティナはこのフレンドリーなギルドを選んだのかな。ティナらしいや。

「実は、ギルドの中で一番修行が厳しいともいわれているけど、一緒に頑張ろうね！」

おかしいな。さっきまでフレンドリーに見えたこの建物の笑みが邪悪に見えてきた。もう、悪の大魔王のような風格さえ漂ってくる。

「入口の前、地面の方にも格子があるのが分かる？ あそこに乗ると不気味な声が聞こえるんだ」

不気味な声。僕はそれを聞いて、乗ってみたいという感情がどんどん大きくなっていく。ティナは避けたがってたけど、ちょっとこのまま前進してみようと。

「やあキミ達！ ボクのおうちの前で何をしているんだい？」

後もう少しで格子に辿りつけるという所で、僕は後ろからフレン

ドリーな声が聞こえるのを感じた。

「えっ、もしかして……」

ティナが驚いているので、気になって後ろを振り向く。そこにはこのギルドと同じ姿をしたポケモンがいた。

「ん？ ああ！ 自己紹介がまだだったね。ボクはプクリン。このギルドの親方だよ」

最初にこのギルドの外見から感じたのと変わらない印象を、このプクリンというポケモンは持っているみたいだ。親方だっているのにそんなに怖く感じないや。

「わっ、私はティナって言います！ このぎつ、ギルドに弟子入りに来ました！」

ティナはかなり緊張しているみたい。僕と喋った時は随分と饒舌^{うぜつ}だったのに、今はかなりつかえつかえになっっている。

「やった 新しいともだちだ！ ちょっと待っててね、中で早く登録しよう！ キミも新しいともだちだよね？」

いきなり僕の方に話を振られた。友達とは弟子の事と解釈し、はいと答える。

それを見るや否や、嬉しそうに格子を破壊して奥にあった梯子^{はし}を下りていくプクリン親方……。

「早くついてきてね。地下二階で待ってるよ。ともだちともだち」

「

ハイテンションでフレンドリーなこのポケモンに呆気にとられながらも、僕達はギルドに足を踏み入れた。

中は外とはずいぶん違った感じだ。カラフルな床や壁に、よく見れば至る所に植物が生えている。食堂らしき所からはがやがやと騒いでいる声が聞こえてきた。

「こっちこっち！　ボクのお部屋はこっちだよ」

プクリンの親方の扉は木製だったけど、その周りは華やかなピンク色で彩られている。

促されるままにプクリン親方の部屋に入る僕達。松明の臭いが鼻についたけど、後ろに積まれたたくさんのお宝の方が印象に残った。

「ここで登録をするからね！　チーム名を教えてください？」

チーム名？　僕は何も考えてないけど、ティナには何か考えがあるのかな。

「え、えええ！？　チーム名ですか？　うーん……」

僕としては何か意味のあるものがないなあ。でも、特に思いつかない。

「私の誕生花にヒベルティアって言うのがあるの。それからもじっ

て、ルティアっていうのはどうかな？」

「チームルティアかあ。響きも好きだし、僕もこれでいいよ」

「決まったね　それじゃあ登録するよ」

プクリンが「とうろくとうろく、みんなとうろく……」となんの脈略もなく歌いだす。きつと、これが登録の儀式みたいなものなんだろう。

「たあーーーーー！」

耳が張り裂けそうになるぐらいの大声でプクリンが叫んだと同時に、自分の体に力が入らなくなっていくのを感じる。

ピカチュウになったから聴覚が増したのかな……。

気絶する数瞬前、そんな事を考えていた僕だった。

目を覚ますと、見慣れない部屋のベットのの上に寝かされているようだ。あんな大声を聞いた後だから、まだ耳鳴りが酷いよ……。

「お、気がついたか。なんというか、オマエ達も……災難だったな」

僕の横にいたのは、僕と同じぐらいの大きさで、青い羽根にカラフルな体を持っていて、極めつけには頭に黒い音符マークがついている。なんだかとても派手なポケモンだ。

「ワタシはペラップ。親方様の一番弟子だ」

「僕はヒカルって言います。種族はピカチュウです」

と、お互いに軽く自己紹介をしておいた。これからは一緒に働く訳だし、仲良くしていた方が楽しいもんね。

「とにかく、登録は済ませたようだし、明日からはキッチリ働いてもらうからな。そっちのイーブイにも伝えておいてくれ」

それだけを僕に伝えたペラップは、すたすたとこの部屋から出ていく。これを言う為だけに待っていたのかと考えたら、ペラップはいいポケモンなんだなあと思った。

ティナはまだ眠っている。よほどあの声の衝撃が大きかったんだろうなあ。

かわいそうだけど、少しティナをゆすってみる。明日の事だもん。今日伝えなくちゃ……。

「う、うん……」

あ、目を覚ましたみたい。目を前足でこすりながらも起きあがった。

「なあに？ 私もう少し寝てたいよお……」

「明日からキッチリ働いてだって。ペラップってポケモンが言ってたんだ」

ティナはよく分からない返事のような返事じゃないような声を出し、また眠りについてしまった。

僕ももう寝ようかな。明日は大変そうだもんね。

目を閉じると、今日の出来事が次々と思い返される。

ティナに助けてもらった事。リオ君にお願いされて、怖いながらも探検に行った事。カラナクシというポケモンに襲われていた僕を、またティナが助けてくれた事。探検隊をやるうって言った時のティナの表情。それからそれから……。

今日起きた出来事に身を包まれながら、僕は安らかな眠りの世界へ落ちていった。

第四話：探検隊キツト

「おつきろおおおお！ 朝だぞおおおおお！」

この前のプクリン親方には劣るけど、それでも鼓膜が破れそうなレベルの騒音が、朝から鳴り響く。

もちろん、この無自覚なのか自覚しているのか分からない攻撃に耐えられるはず、僕は目を覚ます。 跳ね起きるという表現が正しいかもしれない。

「ヒ、ヒカルう？ 何があつたの……？」

ティナも、のそのそと藁の布団から抜け出してくる。 耳を後頭部にぴったりとくっつけ、音を遮断しているように見えた。

僕も今はピカチュウ。 もしかしたら、ティナと同じ事ができるかもしれない。

うーん、耳を動かす方法がよく分からない。 ちょっとだけは動くんだけど、あまり大きくは動かせないみたい。

「ペラップが呼んでるぞー！」

わわ、またあの大きな音が飛んでくる。 耳を塞ごうと思ったけど、いつもと耳の場所が違うから押さえられずに、爆音が僕の頭に直接攻撃してきた。 頭がくらくらするよ。

その大きな口を開けたポケモンは怒った様子で部屋から出て行っ

てしまった、と思う。視界までくらくらしてきて、ちょっと離れているだけなのにぼやけて見えたから断定できない。

「えっと、さっきのポケモンがペラップが呼んでるって言うてたけど……。あ、そうだ！ 私達、昨日弟子入りしたんだった！」

ティナがいまさらのように、さっきのポケモンがいていた事を復唱する。

「そうだよヒカル！ 早くいかなきゃ！」

ティナはものすごい焦っていたけど、その表情には満足げな物も浮かんでいたようだった。念願の弟子入りを果たせてうれしいのかもしれない。

おっと、僕も早く出なくっちゃ。ティナに置いて行かれちゃう。

「遅いぞオマエ達！」

プクリン親方の部屋の前。そこで朝礼が行われるみたい。僕は着いてすぐにペラップの怒声を聞く事になった。でも、さっきの声のおかげでそこまで大きく感じないや。

「す、すいません……」

「ごめんなさい……」

とにかく、今は僕とティナが悪い。素直に謝って、恐る恐る朝礼

の隅っこに加わった。

二匹が隅っこに加わったのを見届けると、ペラップが朝礼を再開する。

「えー、何匹か聞いている奴もいるみたいだが、昨日、新しい弟子入りがあつた」

僕達の左側の方から、一斉に視線が飛んできた。珍しい物を見るかのようなまなざしのポケモン達もいれば、僕達が入ってきた事を嬉しく思っていて、話しかける気満々のポケモン達もいるみたいだった。

「こつち向け！ 話しかけたい気持ちも分かるが、それは夕食の時だ。今日はワタシが面倒をみるから、むやみに話しかけないように！ 分かったな？」

覇気の無い、間延びした返事を返す他の弟子達。 良く考えると、僕達からは先輩に当たる弟子なんだよね。失礼のないようにしなくちゃ。

「返事がだらしないが……。まあいいか それじゃ、今日も張り切っていくよー！」

「おおー！」

さっきの返事とは違う、気合いの入った返事がこのギルドに響き渡る。そして、一斉に梯子を上っていく。外に出るのかな。

「チームルティアだったな。オマエ達はこつちだ」

不意にティナが決めたチーム名で呼ばれる。一瞬反応が遅れたかもしれない。やっぱり、まだ慣れてないなあ。当たり前だけ。

プクリン親方の扉の前の方で呼びかけていたけど、親方の姿は見えなかった。もう自分の部屋に戻ってしまったらしい。

「なあに？ 私達は何をすればいいの？」

「おつ やる気があるみたいでけっこう！ だが、まずは必需品を渡さなければならん」

必需品。きつと、冒険するのに欠かせないものかなのだろう。あれだけ不思議に満ちた所なんだ。準備をしない方が変に感じる。

「まずはコレ。トレジャーバッグという物だ。冒険に必要なものを入れることが出来る」

ペラップの後ろに置いてあったバッグを、片羽を使ってこちらに投げる。

僕がキャッチしてよく見てみる。肩にかけるタイプのバッグで、ティナでも持てるようになっていた。ボタンを開けて中を覗いてみたら、何かオレンジ色の物が入っているのに気がついた。

「これは何ですか？ オレンジ色のリボンみたいですけど……」

「ああ、それはオレンジリボンだ。他にも、キトサンバンダナというのも入っているから確認してみてください」

確かに、オレンジリボンの下にそれらしきバンダナが入っていた。それを認めて、僕はペラップの方に視線を戻す。

「ヒカル。今開けた方の裏側っていうのかなあ？ そっちの方にも何か入ってるよ」

ティナが言ったのは、きつと体に隣接する部分の事だろう。確かに、ここにもボタンで止めてあるポケットがあった。

「よく気付いたな。そっちには不思議な地図が入っている。探検隊連盟と言う所から配布されるものだ。口で言うのも難しいから、実際に見てくれた方が早いかもしれないな」

ポケットを開け、その不思議な地図を開く。雲で覆われているところがたくさんあって、ここら辺しか見えないようになっていた。

それよりも驚いたのが、オレンジ色の点や黄色の点が付いているところだ。オレンジ色の点は見事にプクリンのギルドを示していて、黄色の点は、昨日リル君を捜索に行った海岸の洞窟を示している。でも、似ている地形と言うだけで違う可能性もある。僕はこの世界の地形を知らないんだから。

ティナも横から顔を出して眺めていて、その不思議さに驚いたようだ。首を傾げて、不思議な地図を凝視している。その様子から、この点は海岸の洞窟とここを示しているんだなと確信を持つ事が出来た。

「オレンジ色の点はオマエ達の現在地を示しているんだ。そして、黄色い点が行った事のある不思議のダンジョンを示している。新しい場所に行ったりするとその黄色い点が増えていくのだ」

これについては感嘆の一言だ。不思議のダンジョンを見つけると黄色い点が増えていくとても不思議な地図……。

「ねえねえ、何で私達が海岸の洞窟に行った事があるって知ってるの？」

ティナに言われて初めて気付く。僕達がこの洞窟に行ったのは探検隊になる前、ペラップ達に会う前だ。本当なら知っているはずが無い。

「ええ！ オマエ達、もう海岸の洞窟に行った事があるのか？ あそこはこのギルドに入ってきた弟子達が、初めて行く不思議のダンジョンなんだぞ？」

「昨日入ったんだ。リル君っていうポケモンを探しに」

ティナの答えを聞いて、ペラップの表情がどんどん曇っていく。僕達をどこに行かせるかを先に考えてあったのだろう。それを崩されて困っている様子だった。羽を腕のように組んで思案している。視線にも落ち着きがなかった。

ペラップの中では考えがまとまったようで、羽を元に戻してまた僕達に向き直る。

「その話は後だ。まだ説明が終わってないからな。その地図で雲に覆われている所がある。そこは、まだオマエ達の知らないところだ。今はこのギルド周辺しか見渡せないが、冒険を重ねればどんどん雲が晴れていくぞ」

それもまた凄い機能だ。本当に、この地図は感嘆の一言に尽きる。

「最後だ。これは手渡しで渡しておこう」

ペラップから手渡し　羽渡しともいえる　でもらった物は、
光り輝いている丸っこい物だ。半球のような形で、丸い面の中心に
はピンク色で塗ってある。その周りは白く、また両端に羽のような
ものが付いていた。

「それは探検隊バッジといって、探検隊の証みたいなものだ。色々な機能があるぞ」

そこで一度口を止め、ペラップは何かを思案する表情になった。

「ペラップ。このバッジにはどんな機能があるの？」

ティナが口を挟むと、ペラップが我に返ったように喋り出す。

「あ、ああ。色々な機能といっても、使うのは一つだけだ。その頭
についているボタンを押すとダンジョンから脱出したり、助けを求
めているポケモンを救出したりできる。その場その場によって効果
が違うんだ」

なるほど。だから色々な機能と言ったときに口を詰まらせたんだ。
色々な用途があるの言い間違えたんだと思う。

「これで説明は終わりだ。それで、今日の探検についてなんだが……」

そうだ。海岸の洞窟に行かせる予定だったんだろうけど、僕達が

もう入っちゃってるからね。多分、同じ所じゃなくて違う所を探検させたいんだろう。

「オマエ達はやる気があるみたいだから、次のランクの依頼をやらせてみようと思う。付いてこい」

ペラップに言われるがまま、僕は梯子を上って上の階へ行く。上の階も下と変わらない雰囲気で、楽しそうな雰囲気を醸し出していた。

上に着いてペラップを探していると、僕達から見て右側の方にいるのが見えた。

「こつちだ。ここで今日の依頼を決めるぞ」

そのこの掲示板には、所狭しとたくさんの張り紙がされており、どれも同じような書き方をされている。誰かがまとめているのだろう。

「これが依頼だ。探検隊とはいっても、基本はこの仕事をやってもらう。困っているポケモンを助けるのが、オマエ達の基本的な仕事だ」

読めない。何か暗号で書かれた文字みたいに思える。

そういえば、何で僕はポケモンの言葉を話せるんだろう。そして、何でポケモンの言葉が分かるんだろう。最初はポケモンになったからかと思っただけ、文字が読めないとすると違う気がしてきた。

「うーん、これにしよう。湿った岩場ならそんなに難しくはないはずだ」

ペラップは悩んだ上で、一枚の依頼を嘴で掲示板から剥がした。
それをティナの目の前に置く。

僕の目の前に置かなくて良かった。ティナが丁寧に読み上げられる文章を聞いて、内容を聴き取る。

その依頼はバネブーというポケモンからの依頼で、湿った岩場という所に頭の水晶玉を落としてしまったからそれを拾ってきてほしいという内容のものだった。事情を聞いているうちに笑いがこみあげてくる所もあったけど、きっとこのポケモンにとっては死活問題なんだろう。

「ということみたい。それじゃあ、私達は湿った岩場に行って、水晶玉を探してくればいいのか？」

「そういう事だな。それじゃあ、湿った岩場の場所を教えるから、地図を出してくれ」

僕が肩から掛けていたバッグから地図を取り出す。床に広げてもらい、そんなに場所を取らない為、床に広げておいた。

ペラップは依頼書の下部分を地図に当てる。そうすると、驚いた事に黄色い点が一つ増えたのだ。

「すごいっ！ こんなことが出来るんだあ」

ティナの感嘆に満ちた声を聞いて、得意気になるペラップ。これを見せるのは、僕達が初めてではないんだろう。毎回、新しい弟子に見せて反応を楽しんでいたに違いない。

「さっきは言い忘れたが、その場に行かなくても、依頼書の下部分を当てれば地図上にその場所が現れる」

この地図に依頼書。どちらも凄い道具だと思う。他にもらった物にもきつと凄い効果が隠されているのだろう。

「その地図は本当にすごいですね」

自然に口から漏れるくらい、その地図が凄いと思った。

「そうだろ　それじゃあ、初めての依頼、一生懸命頑張ってくれ
！」

僕達が初めて正式な依頼を受けた瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916z/>

時と想いを超えて ~ヒカルとティナの冒険記~

2012年1月5日18時53分発行